其は復讐也

それは復讐也、自分が死ぬことで彼らの人生を断つための復讐だった。
弱い僕は、立ち向かうなんてことができないから。
今日はなんて月が綺麗なんだろう、こんな学校なくなってしまえばいいのに。
でももっといなくなってしまえばいいのは、弱虫の僕なんだ。
目が痛い、見えない。
感じるのは月の夜が綺麗だという、頬に当たる月明かり。
死ぬ時は怖くないっていうけど、本当なんだ。

其は復讐也。

「きゃははっ、いつもさえない顔ー！」
「やめて痛いよ！」
僕は、中学一年生になってからずっといじめられている。
誰がそんなことをするのかといえば、先生は無視、クラスメイト全員が敵と言えばそうたった。
でも一番つらいのは、皆がその「遊び」に乗じてくること。
皆は楽しいのかな？
そういえば目立たない女の子、あの子だけは攻撃はしてこないけど止めもしてくれない。その子だって、敵なんだ。

二月の十五日。
泣きながら、僕は近くの墓場に行った。
また今日も教科書がなくなって。先生にはなくなった、とられたといってもお前がなくしたんだって起こられた。
佐和ユリカ、彼女のせいだと思う。
頭がいいから僕のことを見下して…。
それに続いて、担任の美術教師。
そして八人。
　半年ずっとこんなの、嫌だ、この前は近所の川に真冬に突き落とされた。
「うっ、ひっ、うっ…」
お母さん、お父さん、ごめんなさい。僕は強い人でいたいから、相談できません。何より、先生が信じてくれないんだもの。
仲が悪くて仕事に夢中で、振り向いてくれないもの。
　墓場で泣くだけ泣くと、大きな木にロープを吊るした。
足元には石を、そして首をくくってしまおう。そう考えた時だった。
『君は自殺しようとしているの？』

「！」
誰かがこの墓場にいるのだろうか、男の声が聞こえてきた。
ずっと周りを見渡すが、声の主はいない。キョロキョロ見回して、やはりいないのを確認すると、首をくくるべくロープに手を再度かけた。
『僕が何とかしてあげようか？』
「えっ」
後ろに暗い影を感じた。
振り向くと、そこには下半身のない人間がいた。
「うわあ！」
驚いて思わず石から落ちた。軽く頭を墓石にぶつけたが、顔をあげれば、満月を背にして、それがいた。
幽霊！
うっすら透けていて、下半身に至っては何もない。うでもない。でも、なぜか顔に包帯を巻いていて、目が見えなかった。
「だ、誰？」
『誰だっていいじゃない、君、弱い子だね。見ればわかるよ。何で自殺しようとしたの？』
目は見えないのに、口元が笑っている。
髪は短いけれど、包帯のせいで目が笑っているのかは確認できない。
夢を見ているの？
『何で自殺なんてしようしたの？』
「…えっ」
口元が笑わなくなった。
その幽霊は、ずっとそこにいて、聞きだそうとしている。
「ぼ、僕は…いじめられていて、もう、嫌で…」
『弱虫！』
途端にその幽霊は笑いだした。
　失礼な奴だ、どんな目にあったかも知らないのに、幽霊何かに弱虫だなんて言われるとは。
でも声はこだましたが、すぐに止んだ。
『それで首をくくろうって？逃げるの？死ぬの？それでいじめた子たちは更生するの？』
その言葉に、声が詰まる。
やだー、いつも暗くて、見てらんない！
　君がなくしたんだろう、人のせいにするなんて君にはがっかりだ、いつもいつも失敗ばかり！
　え？君の体育着？そんなんどこ行ったのかなあ、あはは
　いやだよ、一緒に探してやらない
今まで言われたことのごく一部。
「だって…、ずっと続いて、先生ですら…」
『へえ。それで？』

クスッと口元が笑ったように見えた。
「僕なんていなくなればいいんだ！」
『だから、それで何か変わるの？世界変わるの？君一人死んで何か変わるの？』
「少なくとも、いじめられることはなくなるもの…」
『弱虫、暗いね、君は』
いつも暗い顔をして、髪はぼさぼさで、ぱっとしない。
小学生の頃はそんなにいじめられることはなかったけれど、ここに引っ越してきて中学生になった途端に標的にされた。
それからじわじわと皆が無視をしたり、あからさまに嫌がらせをしてきた。
『あー、うんうん、君の考えていることは少しはわかるよ。美術教師で、担任なのに君の言うことを全く信じないあのセンセー。成績優秀、可愛いけれど、性格はとっても悪い、あの子。いつもぼーっとしているけど、その子に連れられて一緒にいじめてくる子たちに…』
　心が読まれている。
面白おかしく話してくるその幽霊には怖いという気持ちはなく、なんだか逆に腹が立ってきた。
「うるさいな、幽霊何かに言われたくないよ！」
僕は泣きながら、その幽霊に向かって叫んだ。
　大体幽霊が何をしてくれるんだ。
『…だから、そんな子たち、消してしまえばいいんだよ。分かる？』
幽霊は、すぐ目の前に来た。
やはり包帯で目は隠れて見えないが、その服装はまさしく自分の学校のものだった。
「…僕の中学の制服…」
『そ、君の中学の制服。今も変わってないのかな？よくわからないけどね。ここに人なんてめったに来ないからさ、ついでてきちゃった』
笑いながら話す彼は、自分の名前を言わなかった。
　消してしまえばいいなんて、不可能だ。殺人なんてすれば捕まってしまう。
「消すなんて、出来ない」
『君にはできないかもね。でも僕は出来るんだよ、神隠しって知ってる？』
その幽霊はすぐに離れて、月を見上げているようだった。
「う、うん」
軽くうなずくと、またこちらを向いた。
やはり口元は笑っている。
　うっすら透けたからだ。
『僕が神隠ししてあげる』

幽霊は自分のことを「レイ」と名乗った。幽霊のレイで、自分が死んだ経緯、名前は知らないそうだ。
　何で眼に包帯なんてまいているのか、その制服を身につけているのかと聞くと、少し黙った。

『何で死んだんだろうね？』
また、彼は笑った。
神隠しを実行するのはとても簡単だという。
　だから、昨日から一夜明けて、起きた時に自分の部屋にいたレイを連れて、学校に向かった。
『本当は行きたくないでしょ』
レイはくすくす笑いながらついてくる。
うるさいなあ、幽霊の癖に。
人より話したがりなんじゃないのか。
『だってさー、学校に行くと必ず何か隠されたり燃やされたりー？馬鹿にされるし、先生は無視だもんね？』
「うるさいな、笑わないでよ」
不機嫌になりながら歩くが、学校は近付いてくる。
少し遅れれば先生は怒るから、早くつかないといけない。
『早くつく目的はセンセーじゃないでしょ。早くしかないと、誰かにまた何か隠されちゃうからでしょ。本当に君たち子供はやることが可愛らしい』
可愛らしい？
　こんなことが可愛らしいなんて。
『あ、ごめんごめん。この前カツアゲされたんだっけ。それで両親に金を勝手に持っていってって、怒られて』
「黙っててよ！」
そうだ、それを全部話したのは自分だった。
　学校が近付くにつれて、どんどん胃が痛くなってくる。
今日はどんな目にあうのだろう。
また先生には呼び出されて正義という名のお説教、周りは見て見ぬふりで、先生がいなくなれで僕をおもちゃにして遊ぶんだ。
学校に入った時、レイの様子が少し変わった。あたりを見回し、フッと息をついたのが分かった。
　そういえば、この学校の制服を着ているんだっけ。
目に包帯がかかっていてもわかるらしく、ただついてくる。
周りにはレイが見えていないらしい。
「…」
一年B組の教室に入れば、レイは笑わなくなった。
『ん、ああ』
入った瞬間に、自分の机が目に入る。
あーあ、またいつも通りだ。
　せっかくしまっておいた教科書が破かれておかれている。それを周りで笑って見ている。その中心となるのが、佐和だった。

『あの子が中心だね』
「…うん」
破かれた教科書は丁寧にも、今日勉強するところだった。
これじゃあ何回買い変えても、教科書は足りない。
　惨め過ぎて涙出てきた。
「おっはよー、何泣いてんの？何泣いてんのー？」
ひときわ明るい声で、どん、と背中を押してきた。
それは佐和だった。
『成績優秀、担任の先生のお気に入り、家はお金持ち、だけど性格に難ありー。でもこういうのが将来、良い大学はいって簡単に良い会社はいって、いじめたことも忘れて幸せな結婚とかしたりするんだよね』
レイが大声で笑い出した。
　佐和の挑発には乗らない。レイの挑発にも乗らない。
抵抗したところで、何もないのだから。
いや、あるか。悪化するんだったっけ。
『佐和ちゃん、神隠しにしちゃおうか？まだ僕の話信じてないでしょ』
突然のレイの言葉に、驚いてそちらを見た。レイは、にやにやと笑っていた。
そういえば、神隠しをすると言っていた。
　昨日の夜も寝るまでしつこくしつこく、こんな世界なくなっちゃえばいいよね、とか、いじめた人たち全員神隠しすればいいじゃないなんて言ってきた。
そんなことが簡単にできればしたいよ。
『出来るよ』
「…じゃあ、してよ」
その声はレイへのものだったが、佐和たちには聞こえたらしい。
「何言ってるの？アンタ」
「佐和さん、ごめんね。佐和さんのこと大嫌いだから、いなくなってしまえばいいと思ってる。神隠しする」
そう告げた瞬間に、隣から殴られた。佐和じゃなかった。
力いっぱい、顔面を殴られた。衝撃で、床に転がった。
佐和と付き合っているという男だ。
こいつがいるから…、何も言えないんだ。余計に。
「馬鹿じゃねーの、そんなこと出来るならしてみろよ！」
「…」
僕は頷いて起き上がった。
「馬鹿、ちょっと、殴る所は制服の下って言ったでしょ！」
佐和が大笑いしながら彼に絡んできた。
あーあ。顔を殴られて先生に見せても無視だもの。

　レイが、ニヤ、と笑ったのが見えた。やはり彼らにはレイは見えないらしい。
昼には朝に佐和をたきつけた件について呼び出されたが、素直に行ったところで殴られるのは分かっていたので、行かなかった。
代わりに僕は、逃げるように体調不良を訴えて学校を抜け出した。
　担任の先生の呆れた言葉が頭から離れない。
また、サボりかね？
うるさいな。

家に着くまでの間、レイはずっとついてきた。
『じゃあ、佐和ちゃん神隠しにしちゃうよ』
「…できるならしてよ!!どうせできないんでしょ」
『出来ないことを僕が言うと思う？じゃ、明日を楽しみにしておいで。夜はゆっくり寝ると良いよ』
レイは、とても優しい声で言った。
それと同時に、くすくすと笑い声が聞こえてきた。
その夜、レイはどこかへ行ったらしく、部屋に帰ってくるのは、真夜中三時当たりだった。
寝ろと言われても眠れるはずがなく、ずっと起きていた。
『ただいま』
レイの明るい声が響いた。
　するりと壁をすり抜けて、すぐそばまでやってくる。
「何してたの？」
疑うしかない。まさか本当に神隠ししてきたとか？
いや、幽霊だからっていくら何でもそんなこと出来るはずなんてない。
『ん？佐和ちゃん神隠し』
「嘘つき」
『あははっ、嘘かどうかは朝に分かるはずだよ。あと、あの男の子も一緒だったから、二人神隠しだね』
佐和の彼氏のことか。
『そ、佐和ちゃんいなくなったら真っ先に狙われるのは君でしょ？一緒にいたからついでにね』
「…神隠しって、どういう原理なの？」
あの二人がいなくなるなら、それに越したことはない。
でもどうやってそれをしているのか、聞けば、またレイはニヤーッと笑った。
『…今度教えてあげよう。僕のことを信じてくれたらね』
時間は朝四時になって来ていた。
一睡もしないのは疲れるので、僕はすぐに寝ることにした。

朝、学校に行ったが、ちょっとした騒ぎになっていた。

　先生たちがバタバタとかけまわる。もちろん担任の先生も。
なんだろう。
『先生に聞いてみたら？』
後ろでレイが笑っているのがわかる。
確かにこのままではどうしようもないので、たまたま通りがかった別の先生に話しかけた。
「あら、柚木君。ごめんね、ちょっと忙しいの。あっ、待って、佐和さんたちと同じクラスよね」
「はい、そうですけど」
先生は困った顔をして、僕を見た。
『君って柚木って言うの？』
持ち物見ればわかるだろ、馬鹿。
僕の荷物には、ちゃんと柚木昌明って書いてある。
　心を読み取ったのか、レイはごめんごめんと笑い飛ばした。
「佐和さんと後藤君知らない？昨日の夜から帰ってきてないらしいんだけど…」
「え？すみません、わかりません」
「そう、ごめんなさいね、じゃあちょっと皆に聞いてくるわ」
僕は、なんだか闇の中に一人残された気がした。
　振り返ったら、レイが笑っていそうで。
本当に、二人とも神隠しにしちゃったようで。
レイが、一体何が目的でこんなことをしたのか聞きたくて。
でもそれを聞いたら、いけないような気がして…。
『だから、言ったでしょ。さあ次はだれを神隠ししようか？』
レイの明るい声が、凄く怖く感じた。

それから三日が経ち、やはり二人はいなくなったままだった。
その間はクラスメイトも驚いたらしく、いじめるまでは至っていない。
「いなくなった…って、本当なの」
誰もいなくなった夕方の教室、僕は、一人で呟いた。
三日間も、欠かさず登校していたあの二人がいなくなることは考えにくい。家には帰っていない、かといって事故という報告もない。
『神隠しを望んだのは君だよ？どう？嬉しい？』
クスクス笑っている。
レイが後ろで笑っている。
「二人は一体どこに行ったの？死んじゃったの？」
『…、僕のこと信じてくれたみたいだね』
ここまですれば信じないわけにはいかない。
タイミングが合いすぎる。

『二人は、死んでもいなければ生きてもいない』
「…？」
僕は、思わず振り返って例を見た。レイの顔つきはいつもと違って、まじめ。口元も笑っていない。
「死んでもないの？」
『文字通りいなくなったんだよ。神隠し、僕はね、悪霊を集めて佐和ちゃん達を神隠しにやったの』
悪霊？
確かに幽霊ならそれはあり得なくはないが、こんなことができるなんて。
「じゃ、じゃあ…」
『言おうか』
その瞬間、例の口元が嫌に笑いだした。
『僕も悪霊の一種だよ』
高い声が、室内に響いた。
　いつものようにくすくすと笑うのではなく、ゲラゲラと響き渡る。誰もいない夕暮れの教室に、レイの聞いたことのない声が響き渡り、悪寒が体を駆け抜けた。
『死んでもいない、生きてもいない、勿論輪廻転生なんかしてやらない!!君が望んでいたのはこういうこと何だ、君の周りで君を虐げる者は全員いなくなる!!君は、いじめられることもなくなる！いいや、これは復讐何だ、君が奥底で望んでいたことなんだよ!!』
ゲラゲラと口をあけて笑い続ける例を見て、僕は腰を抜かした。
　その時、気付いた。
レイの薄くなった制服に、黒いしみがついているのを。
それは何か分からない。いつからついていたかわからない。それよりも、
今気にかけるのはそんなことじゃない。
　僕は復讐なんて望んでいたの？
「ぼ、僕はこんなこと…」
本当に望んでいなかった？
　でも、いなくなればいいとは思っていた。
『分かる？僕を利用して神隠しし続ければ、君を馬鹿にするやつらをこうして、いなくなることをさせることができるんだよ。僕は君のそばにいよう、一生君のそばにいて』
…神隠しをしてあげる、と、耳元でささやかれた。
「本当？」
そうすればこの先、怖いことはなくなるの？
じゃあ、あの先生も？
この先、僕をいじめようとする人たち全員、いなくなれば。
「…僕の障害を消してくれるの？」
『勿論』

レイは、またもゲラゲラと笑った。
その時、教室のドアが開いた。みやれば、担任の先生がいた。
「先生」
「何だい君か。まだ帰ってなかったのか。所で君、佐和さんに…」
先生なんて怖くない。
『そうだよ、この人も神隠ししちゃおうか』
「…先生、さようなら」
僕は少し笑うと、先生に告げた。それは一時的なさようならではなく、永遠の別れを示していた。

『…』

レイ？
何でそんな悲しそうな顔をするの。
僕は、その夜はぐっすりと眠った。夢の中にはレイが出てきた。
　相変わらず制服を着て、幽霊の状態。
いつも笑っているのに、レイはその夢の中では、珍しく黙っていた。
変なの。
『いいの？本当に』
レイが、真っ暗な世界で、言った。
「なんのこと」
僕は返した。怖いものなんてない。
レイがいると約束してくれたんだもの、それらをすべて消すんだ、これ以上嬉しいことはない。
『じゃああのセンセー、本当にいなくなっちゃうよ』
「構わないさ」
僕はすぐに返した。嬉しい、嬉しい、何だろう、たとえ難いこの感情。
『君のその感情』
其は、復讐也。

朝起きれば、その夢のことが頭から離れなかった。でも、すぐに怖い気持ちはない。
だって、神隠しにすれば嫌いな人なんていなくなるんだもの。
朝行けば、やはり先生がいなくなっていた。
笑いが止まらなくて、僕は思わず教室で一人で笑っていた。
　皆が混乱しているのがわかる。そりゃそうだ、二人に続いてもう一人、このクラスでの人がいなくなったんだもの。
「なあ、柚木」
恐る恐る、といった感じで、佐和と一緒に僕をいじめてきた奴が話しかけてきた。

「何？」
「いや…お前、佐和がいなくなる前の日に…何か怖いこと言ってたよな…」
ああ、そうか。佐和さんに僕は、ごめんね、神隠しにするって言ったんだっけ。それで殴られたっけ。
今は顔のあざは薄くなってきたよ。
「うん、それで？」
『…』
僕は思わず笑いながら相手を見た。
　今で怖かったはずの皆は、立場が逆転している。
ひそひそとうわさ話が聞こえてくる。
僕が手を下したんだしゃない。
　でも、僕が望んだことだ。
「今度は先生が、いないって…」
「そっかあ」
ねえ、レイ。とっても楽しいことだね。
これが早くできていれば、もっと良かったのに。
『…そうだね』
小さく笑うと、皆がざわつきだした。
僕はこの前までの僕と違うんだよ。
「僕をいじめた皆に仕返しできるよ」

帰り道、またクラスメイトに殴られた。公園に連れていかれて、殴るけるを繰り返された。
レイは相変わらずそれを見ているだけで、だけど彼らのその表情は、まるで鬼でも見るかのようだった。
　恐怖にかられて、僕の仕業だとわかって、どうしようもないような表情。
けられても痛くなかった。
「どこにやったんだよ、皆を…」
その声は弱々しくて、思わず僕は笑った。
それと同時に、腹にけりが入った。三人がかりでいじめられても、痛くもなんともない。
「知らない。でも、僕をいじめた人たちはああなるんだよ」
『…この人のうちどれを神隠ししようか？』
レイの声が聞こえた。
「そうだなあ、誰にしようか。神谷君、君は明日からいなくなるよ」
その声を聞くや否や、またも殴られた。神谷君本人が、涙を浮かべて殴ってくる。
でも明日にはいなくなるんだ。
そう思えば、こんな痛みなんてどうってことない。
「明日から、さようなら、神谷君」

一週間が過ぎた。今度は神谷がいなくなったと今度は聞いて、他にいた二人が話を広めたらしく、僕に近寄る人はだれ一人いなくなった。
　僕はその時、ずっとしたかった読書をしていた。
本は大好きだから、図書室で借りてきた。
「ねえ、聞いた？柚木が神谷を消すって言ったの」
「佐和たちまだ見つからないって…」
こんな話が心地よく聞こえるなんて。
　僕は、平安時代の歴史に関する本を読みながら、少し笑ってしまった。
レイのおかげだよ。
僕は君さえいれば、いじめられることなんてなくなるんだから。
『…君は本当に嬉しいの？』
レイの声がとても遠くに聞こえた。

また一週間がたった。
友達なんて元からいなかったけど、いじめられなくなったことに関しては、気分がいい。
　そういえば、神谷を神隠しにしたあたりから、レイは笑わなくなったな。
夜になって、図書館から借りた本の半分以上を読み終わって、レイを見た。
すっかり笑わなくなったレイが不思議でしょうがない。
「何で、笑わないの？」
『…君はここの所、変わってしまったね』
レイが、声のトーンを低くしながら話しだす。
「君のおかげだもの。君が、皆を神隠しにしたから」
レイのおかげ。
皆は自業自得。
『そっか…、次は誰にする？』
そうだな、だれにしようか。
「あ…、そういえば、レイは何で死んだのかわからないって言ったよね」
なんとなく、話題を変えてみた。
　レイは下を向いていたが、その言葉でこちらを向いて、頷いた。
「ちょっと覚えていることとかないの？」
『…柚木君は図書館好きだよね』
「うん、何だ、唐突だね」
『僕のこと興味あるの？』
レイの表情は少し暗く感じる。
　そうだ、ここの所神隠しで頭がいっぱいで。レイのことを全く聞いていなかった。
知っているのは、レイが神隠しのたびにどこかへ行くこと。あとは、何も知らないとばかり。

「うん？そりゃそうだよ。僕に友達はいないけど、レイが友達の様なものだから」
『…ありがとう』
泣きそうな声だった。
何でそんな声をするの？
　どうしてそんなに辛そうなの？
何が辛いの。
『少し覚えていることを話そうか』
レイは、ベッドに座り直した僕の隣に、座っているようなしぐさを見せた。
「レイの昔話聞きたいけど、覚えてないんだよね？」
『…ちょっとだけなら覚えているよ』
「えっ、聞きたい!!」
レイが顔をそらした。
『じゃあ、市民図書館、暇があったら寄ってみて。十年前の新聞があるはずだから』
「何で十年？新聞なんてたくさんありすぎてわからないよ」
十年前に何かあったのだろうか。
ここに来る前のことはわからないから、十年前に事故にあって死んだとか、そういう話だろうか。
『君が首をつろうとした日のこと覚えてる？』
満月が綺麗だったあの日のことかとすぐにわかった。
　レイが突然現れて、それで神隠しをしたっけ。
あ、弱虫って言われて腹が立ったのを思い出した。
「二月の半ばだっけ」
『二月の十五日。それの十年前の新聞のどこかに、弱虫が死んだことのってるよ。そしてこの学校がそれを隠蔽しようとして失敗したこともね』
「…？レイ？」
弱虫が死んだ？
学校が隠蔽？
　一体何があった？
そういえば、なぜレイは目に包帯を巻いているのだろう。
何で僕の前に現れたのだろう。
…何で、最近笑わなくなったのだろう。
『死んでもね。意味ないんだよ』
レイはそれだけ言うと、壁をすり抜けてどこかへ消えた。
何でそんなに辛そうなの？
十年前、何があったというの？

その日、帰り道に図書館へ向かった。本を返そうとしたからだ。

その時、たまたまクラスたまたまクラスメイトに出会った。
皆はもう僕に近付かない。
　その中で、僕に声をかけてきた子がいた。
ああ、と思った。
彼女は、ずっと僕がいじめられているのを黙って、隅っこで見ていた子だ。
「何？」
僕は、図書館にはいって、立ち止まって用件だけ聞いた。
どうせまたいなくなった人たちの話だろう。
「ごめんね、柚木君…。あの、最近何か変わった気がするけど、何かあったの？」
「そう見える？」
長い黒髪をみつあみにした彼女は、八木さんだったかな。
八木…何だっけ、まともに話したことないや。八木加奈子か。
「うん、ちょっと変わったなって。それであざ作っていたけど、大丈夫？」
「うん。痛くないよ。所で用件は何？」
八木さんていつも控えめな性格の子だったよな。
あ、そうだ。
　この子は確か、ここにずっと住んでいる子だったっけ。
「えっと…」
「聞きたいことがあるんだけど、十年前この学校で何かあったか知ってる？」
今日はレイがいない。
昨日からどこかへ出かけて、戻らなかった。
ずっと僕のそばにいると言ったくせに。
「え？あ、ちょっと待って…」
八木さんは何かを思い出そうとしている様子だった。
「かなり前、うん、お兄ちゃんがこの学校の生徒だったからちょっとはわかるんだけど…十年前って言ったら、この学校大変な時よね」
大変って何だろう。レイに聞こうにも、レイがいない。
　借りていた本を返す手続きをしている間、彼女は話してくれた。
図書館にある小さな椅子に二人で座る。
そういえば、こうして女の子と話したことなんてなかったかもしれない。
八木さんは、一生懸命思い出そうとしている。
　意外だ、八木さんはちゃんと真剣に考えているんだ。
「十年前、自殺があったのよ」
「…え？」
「かなり壮絶ないじめかな？があって、飛び降りた生徒がいたの。それで、いじめ黙認していたって話題になっちゃって、大騒ぎだった、ってくらいかな。うん、それくらいしかわからない」
へえ。この学校で？

「誰とかわからない？」
「流石にそれは…。あ、でも私たちと同じクラスだった」
レイが一緒に学校についてきた日、教室を見てため息をついた。
レイはずっとこの学校の制服を着ていた。
レイは、神隠しをしていくたびに段々笑わなくなっていった。
レイは現れたとき、僕のことを弱虫だと言って笑った。
何で、レイはこの学校の制服を着て現れた？
　…もしかして、レイはこの学校で何かあったのだろうか？
「…それ以上わからない、ごめんね」
「…この後市民図書館で見つけものしたいんだ、手伝ってくれる？」
レイは、本当は何をしたかったのだろう。
　何でレイは死んだのだろう。
覚えていないというのは、…嘘なのではないだろうか。
八木さんには断られるかと思ったが、八木さんは笑顔でうなずいた。

十年前の二月十五日。
市民図書館の新聞をひたすら漁っていた。
十年前、十年前の二月十五日。
量が多すぎてわからない。
　大きな市民図書館には、大量の新聞が保管してあった。
八木さんは同じように探しているが、三月の記事を見つけ出した。
「あれ」
三月の新聞、それは十年前だった。
一面こそ飾っていないが、小さな所に、学校について書かれていた。
「三月？」
「うちの学校のことよね、これ」
八木さんは不思議そうにそれを眺めていたので、のぞいてみた。
「学校側はいじめ隠蔽、しかし生徒の遺書により、いじめが発覚。校長らが遺族に謝罪」
十年前のその記事には、遺書の一部が書かれていた。
被害者生徒の名前は「霞山礼二」当時十三歳。
「ちょっとかして、これ…」
「他のも探してみる、けど、どうしてこんな昔の探しているの？」
その言葉と同時に目に飛び込んできた、被害者の名前と、顔写真。
遺書の内容。
「目をカッターで切りつけられて、失明…？礼二…レイ…、この学校…」
遺書には小学生の時からずっといじめられ、それがエスカレートして、二月十五日に学校から飛び降り自殺をしていた。

　失明。
レイは包帯をしていた。
いじめられていた僕を弱虫だと言った。
「友達のことを、知りたいんだ」
八木さんにそう告げた時、レイがやってきたのを感じた。
レイがどうして死んだのか、分かってしまった。
　二月十五日、確かにこの学校で自殺があった。
「レイ、君のこと？」
だいぶ日が落ちてきて、図書館のすみに二人でいたところに、レイがやってくる。
レイはたたずんでいた。
　側に八木さんがいるが、レイを見ることができないらしい。
それでも構わずに僕は続けた。
「ねえ、何でそれなら言ってくれなかったんだよ！」
「誰と話してるの??」
『…だから、死んでも何もならなかったんだよ』
レイの声が聞こえた。
八木さんも気づいたらしく、あたりを見回しているが、姿が見えなくて驚いているようだった。
　遺書の中身は、主犯を含め、担任もグルになっていじめていたこと、金をとられて、最後はカッターで傷つけられたせいで失明してしまったことが書かれていた。
両親に相談できなかったことと、自分と同じ人が出ないことを祈るような内容だった。
学校側が隠蔽をしようとしたけれど、それが遺書によって暴かれた。けれど、未成年者が主犯だったことで、担任はともかく、彼らは正式には裁かれなかった。
死んだって意味ない、神隠ししてしまえ。
　弱虫、と言っていたのは、レイが自分に向けて言っていた言葉だったのに、僕はようやく気付いた。
レイは目の前でその新聞を眺めていた。
僕は、その目に触れようとしたが、手がすりぬけて出来なかった。
「何で話してくれなかったんだ…」
涙が出てくる。
友達って、本当に。
『弱虫だから。僕が。死んだって何もならなかったよ。この十年、見てきたけど、皆、何もなかったかのように仕事をしているよ。一応前科ありだからいいところじゃないけど。担任は解雇された程度かな、あとは知らない』
「…レイ…」
レイは語り出した。
『だからすぐに首を吊ろうとした君を見て、僕と一緒だと思った。でも、僕よりまだ余裕があると思ったよ。それに、僕も悪霊の一種だから。君なら、もしかしたら乗り越えてくれるかな、な

んて思っただけ』
神隠しさせた意図は？
「神隠しさせたのは何で?!」
『死んでもどうにもならないって言ったよね。僕だって君のこと見て、嫌な気持ちにならかったわけじゃない。ならとことん付き合おうと思った。けど、君は段々変って行った』
僕は神隠しを四人した。
それをしていたレイはどんな気持ちだったのだろうか。
　そんなこと、考えたことなかった。
じゃあ神隠しした人間は戻ってくるのだろうか。
そう思ったが、心を読み取られて、レイは首を横に振った。
『どうしようもない人間はいるもんだ。僕はね、神隠しした四人のうち、三人は僕をいじめた連中と見立てていたよ。…でもさ、人間って死んでもいいのなんていないんだよね。そりゃ僕は今も彼らのことは憎いけど。今、家族を持って幸せそうな彼らを知っている。でもね、神隠しに合わせたら、最初に言った通り。死んでもないし生きてもいない、輪廻すらしない。ちょっと可哀想かなって思った』
「誰の声なの？」
八木さんが怖がって、僕の手をつかんできた。
僕が泣いているのを見た八木さんは、すぐに手を離した。
　ごめんね、レイ。
ようやく分かった。
「レイは、僕を試したんだね」
「柚木君？」
『試す、か。そうだね…』
レイは、初めてその場で全身を現した。
下を向いていて、制服は白い部分が黒くなっていた。
　それが血だと気付いたのは、本人が死ぬ前の姿を見せたからだった。
八木さんにも明確に見えたらしく、悲鳴をあげた。
「レイ、それが死ぬ前の姿なの」
どこか雰囲気が僕に似ていた。
暗くて、不安そうな顔。
目に付いた包帯をとっていくと、その目は閉じられていたが、カッターの跡があった。
『僕は君と似ているよ。目をあけることは無理見たいだ。とても痛い。包帯取ると凄く痛い。あの日に、完全に失明するとわかって…直前に病院抜け出して、遺書書いて、学校から飛び降りたんだ。飛び降りるときにはほとんど目は見えなかった』
言葉が出なかった。
　弱虫弱虫笑われたけど、レイはそんなことを望んでいなかった。神隠しなんてしたくなかった。

『あとはその新聞に書かれている通り。ま、十年も経てば誰もが忘れるさ』
「レイ、ごめん」
ああ、利用されて辛かっただろうなあ。
下手すれば僕がレイの立場になっていたのだから。
『友達って言ってくれたね、さっき』
レイは目を閉じた状態で、言葉をつづけた。
『ありがとう。僕はずっといじめられっ子だったから、友達って言ってくれたの、嬉しかった。はは、ついつい仲間の幽霊に言ってまわっちゃった』
「レイはどうしたら、成仏できるの？」
ずっと今日いなかったのはそんな理由？
ただ友達って言っただけなのに、確かに、僕にとっては夜も朝もずっと一緒にいて、何気ない会話もしたけれど。
　利用したことに変わりはない、更にこれからも利用しようとしたことには変わりはないのに。
その場でしゃがみこんで、ひたすらないた。
八木さんが優しく背中を撫でてくれるのが分かった。
『成仏かー。分からないなあ。でも、僕がしてほしかったのは、君が乗り越えてくれることかな。ごめんね。その気にさせて酷いことさせたのに、こんな綺麗事ばっか言って』
「…レイ、覚えてるんだよね、本当は」
『うん？』
レイが、少し困ったような声を出した。
あの墓場にいたということは、あの墓のどれかにレイの遺骨が眠っている。
誰も来ないといいきったあの墓場に、眠っている。
「レイの墓参りはさせてよ」
『…墓参り？』
「柚木君、この人は、幽霊なの？ずっと調べていたのは、この人のため？」
八木さんの言葉に、頷いた。何度もうなずいて、そのたびに情けないような声が出た。
友達だなんて言葉に喜ばないでよ、馬鹿だなあ、レイは。
　神隠しさせた僕のことをそんなふうに思わないでよ、最低じゃないか僕なんて。
『僕が、君の立場だったらどうなってたかな？神隠しさせないことなんてなかったと思うよ』
クスクス笑っている。
いつものレイだけど、目が痛いらしいのか、時々目を押さえている。
「ごめん…皆ごめん…」
「四人いなくなったのは、柚木君がそうしたの？」
八木さんの言葉が胸をついた。
嫌われるのが怖いな。
　でも、事実だもの。
僕は頷いた。

「そっか…。ごめんなさい、ずっと見てるだけで…」
「え？」
八木さんを見ると、申し訳なさそうな顔をしていた。
「何で？僕は四人も神隠しに合わせたんだよ、皆のように怖がるのが普通でしょ…」
「神隠しが具体的にどういうことかわからないけど…、四人いなくなったのは、自殺しようとまで追い込んだ結果…、いいことじゃないけど、この人の言うこともわかる気がする」
絶対にいいことじゃないけど。
神隠ししちゃったんだもの、帰ってこない。
僕はなんて懺悔すればいいだろう。
『…覚えている場所かー…、死んだ場所と、自分の墓かなあ』
レイが、図書館から出て行こうとする。
すぐに僕は、新聞を片づけた。
レイが少し笑ったのがわかる。前のように邪気のある笑みではなかった。
「わ、私もついてく!!」
八木さんは途中、花屋で菊を買ってくれた。僕もそのお金を半分出す。
『あはは、本当に墓参りしてくれるんだ。もうどれくらい墓参りなんてしてもらってないかなー』
レイが笑っている。
ずっとついていけば、あの場所、暗い墓地。
丁度僕が首をつろうとして転んで、頭をぶつけた墓だった。
霞山って書いてあるから、間違いはない。
『…ここ。僕の名前は、霞山礼二。だから、レイって名乗ったんだ。ねえ、そこの君』
八木さんの方に振り替える。
ちょっと怖そうにしている八木さんだが、レイを見て、反応する。
「は、はいっ」
『八木さん、柚木君のこと、頼んでいい？僕の代わりに、力になってあげたりしてくれないかなあ。生前僕には友達なんていなかったから、図書館に二人でいるの、羨ましくなっちゃったよ』
「駄目だよ…」
僕が呟いたが、八木さんは、ギュッと僕の手を、掴んだ。
「まずは友達としてなら！」
えっ、なんか間違えてない、八木さん。
『あはは、面白い子だね。付き合っちゃえばいいのに、なんて。でも、よろしくね』
菊の花束を供える。
真っ暗な中で、
レイが笑った。
『!!』

途端か、レイが異常を感じ取ったらしい。
目を押さえてうずくまった。でも、触れることもできない。
何があったのだろう。
「レイ、どうしたの!?」
『…ううん、何でもないよ』
フッと笑うけれど、レイに何かが起こっているのが分かる。
どうしよう。
でも、放っておけない。
「…僕たち、少ししか一緒にいなかったけど、友達じゃないか!!」
勇気を出して言うと、レイが、こちらを向いた。目に傷がなくなっている。
『…ありがとう、僕も、君の友達だから。ありがとう、僕はこれで消えるみたいだ。あと、ごめん、一つ黙っていたことがあるよ』
レイの体が薄くなっていく。
「いやだよ、消えないで」
すがりつくように手を伸ばしても、通り抜けていく。
『神隠しは、僕がいなくなければ、解けるんだ。ごめん…だからまたいじめられても、何とか乗り切ってほしい』
「!!」
レイの言葉に、僕は心の底からほっとした。
レイはそれだけ言うと、眼を開けた。
にっこり笑った彼は、随分と優しそうな顔立ちだった。
ありがと。
そんな言葉が聞こえて、彼は光の波に飲み込まれていった。

それから三日経った頃、レイはあの墓場からずっと現れなくなった。
八木さんと僕が見前で消えて行った。ただ友達が欲しくて、ただ乗り越えてほしがっただけだったなんて、最初から言ってくれればいのに。
　本当に馬鹿だなあ、でも、きっと僕は神隠ししなければこんなふうにならなかっただろうな。
レイが消えた翌日、四人は消えた直後から記憶が一部ない状態で戻ってきた。
でも、少し僕のことを怖いみたい。
そりゃそうさ、神隠しに合わせた本人とまた対面するんだから。困ったなあ、またいじめられるのかな。
　そう思っていたら、八木さんが相談に乗ってくれた。
まだ全員とは和解出来ていないけど、いじめられることはなくなった。

さらに十年が過ぎた。
僕はそのまま高校に行って、大学に行った。

僕は頭が悪いけど、一生懸命勉強したよ。
　中学の間は神隠しの四人とはあまり話さなかったけど、段々友達ができるようになった。
大学といっても短大だから、卒業してすぐに職に就いた。
仕事のミスで怒られてばかりだけど、そんなとき慰めてくれたかなり年上の、先輩の話を聞いた。
「柚木君頑張ってるね」
僕はその先輩に飲み物をおごってもらって、一緒に座っていた。
　この先輩は、家族がいて、子供がいる。
よくお世話になっている。
「彼女とどう？」
僕は八木さんと、高校に行ってから付き合い始めていた。
かなり遅い方だけど、それまで友達として何でも相談に乗ってくれた彼女に、勇気を出して告白してみたら、簡単にOKをもらってしまった。
「あ、今度誕生日なんですよ。それと…友達の命日で、その時は一緒に花を持っていこうかって言ってて」
あれからレイは出てこない。
全く。
少しさびしいなあと思い始めている。
「命日？そっか、友達亡くなったんだ」
「…かなり昔ですけど、自殺してしまったんです。彼にはお世話になったんで」
なんとなくコーヒーを飲みながら喋ってみた。
「そういえば、君の中学って、私と同じなんだってね」
「そうらしいですねー…」
ん？この先輩、年齢的にレイが生きていれば同じくらいかな。
「私は、中学の時取り返しのつかないことをしてしまったんだ。人を殺してしまったんだ」
ぼんやりと告げられて、はい、と頷いた所で、思わずコーヒーを吹きだした。
「記事にもなったよ。その子、自殺してしまってね、遺書に私のこと書かれていた。戒めとしてもう二度と過ちはしたくないな。彼のためにも私のためにも。あっ、すまない、このことは内緒に」
「先輩、その人の名前って、霞山…」
「…」
先輩はそのままどこかへ行ってしまった。
　少し頷いた気がするけれど、先輩はすぐに戻ってきた。
またいつものように仕事をしている。
レイ、君がいたらきかせてあげたかったな。
反省はちゃんとしているみたいだよ。ってことくらいはさ。

「柚木君、お待たせ」
帰り、八木さんと会った。
その日は二月十五日、バレンタインのすぐ後で、八木さんから手作りのマフラーをもらった。
八木さんは八木さんで、今は教師をしている。
新米だから悩むことは多いらしいが、生徒からの評判がいい。
　レイのことを知っていたから、余計人間関係には気をつけているらしい。
近くの中学校の新米教師として頑張っている。近々、母校に移るらしいこともきいた。
「明日だね」
そう言われて、明日が彼の二十回忌を思い出す。
もう十年も前なんだなー。そんなことを考えた。
明日は、レイの墓場へ行くつもりだ。
そういえばこの前レイの墓場に行ったとき、花が添えられていた。
誰から誰へのかは知らないけれど。
「そうだね…、レイもう生まれ変わったりしてるかなー」
「だと良いなあ。優しそうな人だったね」
うん、と頷いた。
もう少し落ち着いてお金たまったら、八木さんにプロポーズしようとしているんだけど、レイはどう思う？
　全く幽霊が人の人生変えるなんて、信じられないな。それが自分のことを弱虫だなんて言うなんて、もっと信じられない。
本当に、全く。
それだけ人の人生変えられるんだから、レイはもっと誇りに持ってもいいと思うんだよね。
僕はあれ以来随分と性格が図太くなったよ。
「そうだね」
八木さんが腕を組んできた。
あーあ、レイがいたら見せつけたいかも。
笑うか嫉妬されるかどっかだろうな。
「あ」
雪が降ってきた。
八木さんの誕生日ももうすぐだ。
実は八木さんの誕生日は、レイが死んだ人同じだった。
「誕生日何がほしい？」
そう聞くと、八木さんが答える。
「んー、指輪」
「…逆プロポーズ？」
なんてからかってみたら、意外な言葉が出た。
「…うん」

ごめん、レイ、いますっごい幸せ。
だから、生まれ変わったら君も幸せになってほしいな。

終

あとがき

と、言うわけで一日小説。
これは元々企画書専用に起こしたものですが、全く出来上がらないので、小説にしてみました。
企画書の方では展開が全然違います。

かなり甘ーい終わり方ですが、企画書の方がきっつい話になっているので、最後くらいはこんな感じにしたいと。
舞台はうちの中学ですが、制服はデザイン変えてます。
表紙はレイ君。